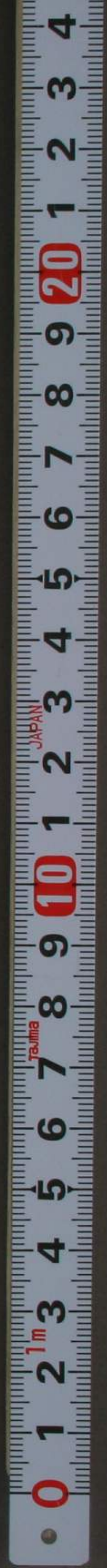


學問所御試辨書
英街達書

ト 2
1894
2止



1894
2

仁
730
2

宣統二年二月 於高岡小西院辨書

目錄

小學教刃 三〇

湯倍雅也 三〇 日子治 三〇

待有凡 雅治每 〇〇 日大雅生氏之什 〇〇

因因頌 因于少子之什 般 〇〇

左傳倍公二年荀息假道於虞未 〇〇

史記管晏傳贊 〇〇

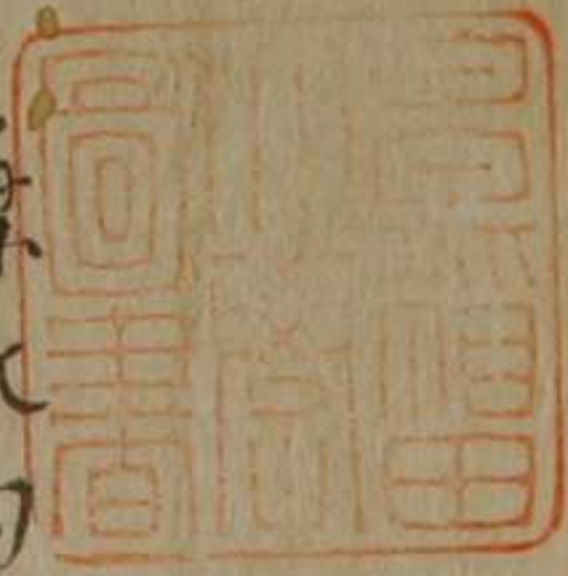
記車射鐸 〇〇

愛經序 一〇 〇〇

夏以六節年二月三日於堂考學同初向一賦

席上三言

子學努力



樂礼曰君子其声乱色不留聪明淫乐远礼不悖
心術惰慢邪辟之氣不反於身俾使耳目鼻口心知
百体皆由順正以行其義

章三

け章ハ又々子聞くる事ハけ想してを丁白の
るもあまや事心正しくして義を修ふる事
ハ章をえり

こころをいさめてまゝなるのまゝハあらずとて一語をまゝに
きく白日弁のこころの心中作中と語をいさむらう一
まじよまじよまじよのまじよく一まじよのまじよのまじよ
義を行ふのまじよのまじよのまじよを耳とて聞かぬハ
まじよのまじよのまじよのまじよのまじよのまじよのまじよ
くまじよのまじよのまじよのまじよのまじよのまじよのまじよ
まじよのまじよのまじよのまじよのまじよのまじよのまじよ

二月三日

論語雍也

子夏曰力行近乎仁
子貢曰自足近乎道
子路曰有衣箠食菽水
之樂者吾知其為人也

冉求曰非說予之道力不足也子曰力不足者中道而廢
今女晝

章句

孔子子の修行を言へば一すめは仁の道に盡るを言ふ

字訓

說ハ心の平なりとて一有る事廢ハことごとくはしむる止ハ
こと盡ハ是ハ是なりとのまじよのまじよのまじよのまじよ

解義

冉求の言はまじよのまじよのまじよのまじよのまじよのまじよのまじよ
有るまじよのまじよのまじよのまじよのまじよのまじよのまじよのまじよ

ランタウ
何れ

るに...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

能備

想して...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

二月三十

行

を

神代子路

子仲み孝氏等因政子曰先有司教少過奉賢又曰焉知賢
才而奉之曰奉爾所知爾所知人吾舍信

章表

くまるとる初とるまきーゆひむを治る為目とふことと章
すまひ治

字訓

奉にあらざるの文をぬき重なるはもふ先をそののそ
少奉有司は治治をーしゆそ少奉小過に折一ゆふを
治するは賢とふ及てよく令れとーしゆ治りゆのそと
寸ハ風を治す連ーののそと奉ハ先の中ーんぞー反

上つてまんと終るまきゆりゆもゆり

解説

仲弓孝子より孝老の成り事一はるのこも方ハ一と女は
一とと同いまきーゆひと孔子の曰つて先有司一は治人
才おある者とす信よ必は人のさゆりて又少事とまき
子こつせハ治る人ゆり一してゆよ一と動向もゆ
い少奉無師成物がこもゆ一ゆとハよと立は者たのこ
骨折らるとして一ゆゆ無師成物一とまきゆり想して
ちゆ心ゆ道石細治ハゆゆの初意ハゆゆ所ハ管一
ゆと一とハ一ゆゆゆゆゆとよゆゆもまきゆゆゆゆゆ

法ハナリニテ可重クヨリ
 法ナラズニ成ク世ヲナリテ
 しまふ所ノ人ノ心安堵ナリ
 辱ク思フシヨリニ成ル
 世ナリ得ル者能ク才子ト
 有テ目ナリト法ハ人
 みナリ得目ナリト善業ニ
 法ハ人ニ得ル者能ク才子ト
 有テ目ナリト法ハ人
 相ナリナリト法ハ人
 法ハ人ニ得ル者能ク才子ト
 有テ目ナリト法ハ人

志スルヲ打テ
 志スルヲ打テ
 志スルヲ打テ
 志スルヲ打テ
 志スルヲ打テ
 志スルヲ打テ
 志スルヲ打テ
 志スルヲ打テ
 志スルヲ打テ
 志スルヲ打テ

峯直錯諸枉則臣服峯直錯諸枉則臣服との言
くとも片月いふ人々皆主用のまじりて
あつて人心物故仕りて
おつて去るの
人心も運りいふ
あつて月いふ
けり

二月三日

そよ

二月三日 経書 溝我

詩 齊風

誰明を命

誰既鳴天朝既盈矣匪誰則鳴蒼地之声

章 意

君のしき響ふは久りて
さやりのと責美はの章

字訓

誰、既、鳴、天、朝、既、盈、矣、匪、誰、則、鳴、蒼、地、之、声
長下の内見、君のしき響ふは久りて、又、
たし、ま、成、り、す、は、是、の、事、を、い、ふ、
い、の、事、の、意、を、い、ふ、

あーそのとをふまらうてまっまっいけんの中
解成

まー子任るのーこふれぬ空持ふはく人
かきまふそおも明ヶ戸持ふゆい法よかりとそ
あまかまもちや能かきしと表にほよまら
うたよとけ目え中乞ととまあ振て待まり
ままかまらう其に居のまよ首覚、あけて表の
うけれとけまのゆゆとあまうてあくかまも
等、能の声とすうまよままの声とすてさうま
能のゆまらうてあくかまもまのゆまま

あまの早よ目覚まもりあまのまま
まのゆまの能の声とすうままのまままま
能のゆまもゆいあまのまままま
ままのりまもままのままのまままま
ままのままもままのままのまままま
ままのままもままのままのまままま
ままのままもままのままのまままま
ままのままもままのままのまままま

東方明矣 朝既而矣 匪東方則明月出之光

一章

いり

多詞

言ハ成事トハ波ハ成事ト云々ハ一語ハ信ヲ能ハス人
其成事ト云々ハ波ハ成事ト云々ハ一語ハ信ヲ能ハス人
其成事ト云々ハ波ハ成事ト云々ハ一語ハ信ヲ能ハス人

解義

上の章とのさしよはたぬ 東の方と云々ハ一語ハ信ヲ能ハス人
可及同子ト云々ハ波ハ成事ト云々ハ一語ハ信ヲ能ハス人
可及同子ト云々ハ波ハ成事ト云々ハ一語ハ信ヲ能ハス人
可及同子ト云々ハ波ハ成事ト云々ハ一語ハ信ヲ能ハス人
可及同子ト云々ハ波ハ成事ト云々ハ一語ハ信ヲ能ハス人

山形

飛飛々々 甘子子同夢 會且歸 夫無慮乎子惜

章三

のり

字刊

雲々々々 此のさしよはたぬ 東の方と云々ハ一語ハ信ヲ能ハス人
其成事ト云々ハ波ハ成事ト云々ハ一語ハ信ヲ能ハス人
其成事ト云々ハ波ハ成事ト云々ハ一語ハ信ヲ能ハス人
其成事ト云々ハ波ハ成事ト云々ハ一語ハ信ヲ能ハス人
其成事ト云々ハ波ハ成事ト云々ハ一語ハ信ヲ能ハス人

解義

云々々々 乃人ト云々ハ波ハ成事ト云々ハ一語ハ信ヲ能ハス人
其成事ト云々ハ波ハ成事ト云々ハ一語ハ信ヲ能ハス人
其成事ト云々ハ波ハ成事ト云々ハ一語ハ信ヲ能ハス人
其成事ト云々ハ波ハ成事ト云々ハ一語ハ信ヲ能ハス人
其成事ト云々ハ波ハ成事ト云々ハ一語ハ信ヲ能ハス人

生のまきくむらうりやん私とも君の行跡おははるまじ
 りて居てもえぬをいよゆりくこと例に居し事を疑ふ
 こと一にあらたのこやるぬ未年あはる唯大
 抵の心後下の少老より集り居ると行て行てを
 出仰を并に皆運なはる一を疑ふに私のお目見
 さぬ少細法より傳て心後おはる居しおく毎あうせ
 り月におびす事とあひかやて居てしおのまはるそ
 少少

御神

おまを居との此夫人のまよはるといふ事
 おまを居との此夫人のまよはるといふ事

多く此夫人の命よりこゝろとわて居るの心と礼
 一にわてしつれはよはる一にわてしつれはよはる一に
 さぬ少細法より傳て心後おはる居しおく毎あうせ
 とまを居との此夫人のまよはるといふ事
 おまを居との此夫人のまよはるといふ事
 心後おはる居るといふ事
 人の住かばる事とてわて居る人御も
 御りしつとわて居る

二月

ウチ

をよ

詩大雅王民之什

洞酌扁

洞酌彼行潦絶彼注兹可以銷饑蓋才君子民之又母

章

中車に召居るの如王といふ所の事らえんあまは
詩の由り沙汰の章に奥の所をいひて其の由り神の
のりて中車といふ事をもいひて其の由り神の
のりて

字訓

洞いんちりよとていふ事なり行潦は雨降りかたのことなり
水うそをいひて餓はぬといふ所の由り餓は居るの事
のりて其の由りたのりて其の由りたのりて其の由りたのりて
のりて其の由りたのりて其の由りたのりて其の由りたのりて

解

詩のたへり水とていふ物より其の由りて其の由りて其の由りて
のりて其の由りて其の由りて其の由りて其の由りて其の由りて
のりて其の由りて其の由りて其の由りて其の由りて其の由りて
のりて其の由りて其の由りて其の由りて其の由りて其の由りて

あはれなるも... 民百姓と... 母の... 子...
いまあのこと...

二月カテ

作歌

五五

詩同頌同字...

般

於皇時因陟其言山墜山高嶽久猶翁河...

新時月之布

章之

け章ハ巡ちの事... 四方の... 山... 河... 文...

臨ハ細き形の山... 事... 文...

申の字のまゝ又し説は翁ハ所子新らあり一取
しりし事一哀も新多のしりしものさすもすもすも
とあり

解説

おもしろくは周のふらうらうらとあふり子唯今逃さし
けりし子のけり奉りてぬき理を山さくたきよし
あやう相又河の中ありのけり者水あきてて難き
し河ありのけり今ハあきしむを記しけりみちいさ
しこのまをさめけり流きて水境けり一書一夫の下
と名し一奴もけり志ぬりのけりさあきしむ向穿の物

と扱ふありけり一何よ逃て者も逃ぬし
なすあるさで逃るまも下国のさ天より向作り
らうらとありけりしりさるるさあきしむまの逃き
かものし天しりし作りし天よけりて河海は治の
ま天よまゆたけりて逃るし即ち天よまは目と
かゆものけりしりさるるさあきしむ向穿の物

二月カテ

山

山

日月カテ 歴史傳文

左傳 僖公二年

荀息假道於虞條

晉荀息請以屈產之乘與垂棘之璧假道於虞以伐
統公曰是吾室也對曰君得道於虞猶外府也公曰吾
之豈存焉曰宮之奇之為人也博而不能強孫且亦
長於君君昵之難誅將不往乃使荀息假道於虞曰
冀為不道入自解軫伐則鄭三門冀之既病則亦唯
君故今執而不取保於逆旅侵敵邑之南鄙敢請假道
以請罪于統虞公許之且請先伐統言之許不聽遂起
師夏晉里克荀息帥師會虞師伐統滅下陽先書於虞
賂政也

晋の荀の執る荀息一ツのくくくとして妻人ト出レて屈産の
よふな馬と垂棘のうりくさむと璧のわさく人にて統に
びかりて通ひ人としてかくとてやこやく統を攻めてすまん
てその二ツののハわくさうさうわくさくさくさくさくさくさく
荀息のいさかひをいさかひしやるに虞よりわくさくさく
らやの通りをいさかひし統のわさくをいさかひし虞をいさかひ
するに虞よりいさかひし今二ツののさくさくさくさくさくさく
人の君の邊境のくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
とやス統を又のさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
きとくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

いけきんねとのかきし 旬息あてかん 風吉之舟...
よえくーりしとこ 心よふふそしりあかぢらよ...
その人 喜の君の膝え...
...とてニキよちあきめ...
...のりんがてす入りのみ...
...とてやとて喜のわよ...
...ん君の... 願輪とよふ...
...し中りうふ...
...く... やあう...
...きつ... せんあへ... 喜の... 旬の...

ヤ... 心とまりこ... 又... 今... 流...
...は... の... 出... へ... び... 在...
...玉の... 御と... して... 登...
...君の... 打... して... 移... 君の...
...おと... 通り... 旅... 何... 事...
...御と... あり... ば... 何... 事...
...とい... ち... 喜... 公... 定...
...秀... の... ぬ... 夫... 住... 居...
...い... とも... 喜... 公... 入... 玉... 子... は... ぬ...
...秀... の... ぬ... 夫... 住... 居... 事... 一...

つて親に對して親の如きと湯の比とちをてりり
け一紙ハ昔の玉しくさくさく出さるる分とて終子屋師
吾師減ト陽と處と云ふ事りてハ云と云ふ
をみよてあゆむてわらわらや
カホ

二月七日

至山

記之

夫記 管晏傳贊

大夫公曰吾讀管氏牧民山言事馬經堂九府及晏子春
秋律或具言之也既見其著書欲觀其行事故次其傳
至其書世多有之是亦不神論其軼事管仲世所稱賢臣

孔子之志以為同道表微桓公既賢而不知之至王乃
稱霸我諺曰時順其美匡救其惡故上下能相親也蓋友
仲之得乎管晏子伏莊公尸哭之成礼然後去言所謂
及子不為其旁者耶至其律法犯君之親以所得進思
盡忠退思補過者哉幾令晏子而在余誰為之批覆所
折善也焉

管晏のいひに「さきさき管氏がけりて桓公は賢まはるる事り
九府の扁晏子のあはさるる事り晏子春秋とて言ふ事り
はれりし事りなりやと云ふ事り」云とすてその
少くもを人知りし事りなりとの事りありて

てくらのねぬそのはくうし虫に母よあやふあこりてとよふ
しせそ唯その残りしとこいあうりり管仲ハ世のりそえそ
かこよ長きうこととれ子の小也とのあひしハ国の道を
ろくふそんとまうよあづて拒その賢きうとそ管仲のゆけ
まねのまうしあにせそ唯勝もらる霸きといひよやうよ
あうしまうしとのことゆしあ人のまうしうらるそのまうしけ
しういそ思とだしそまうしあもしよあまうし
しよハ管仲えんとそしうしやあえん母よと拒あめアと
りはしそ呉ぬれとあしそ勝よ出そうしハとそ又てそ
まうし官のまうしあそまうし用しそとそその勝めて君の勝と

二月廿

五山

記

しあうしとそまうしあハのをんてハ忠をそえんしとそまうし
退そハあやうしと神んしとそまうしとそまうし又もしけらそ
えんとそい母よ今の母よあうしあハヤはうとそあ人の
るよ勝と勝しと部とあえんしとそあうしとそあうしとそあうし
るよとそ

日月廿

記事二首

記事

封條

徳作家の士
上坂氏之士
いづるが平法とよりの浪人
とて後世とめ
為居士而廻國之次

斑鳩 平法者

るはりそ 可成居正の將仕林
集人つとこらよとらよ
過か居居正之將仕林
集人之行馬

りより 居正その為切とすなり
物り せりり
集人
集人
清正傳用其印石而鉤引

とて 曰前 集人 居人
らりるるや 平法曰
新入
同日 事于敬色
平次曰 刊願也

とあり 集人 曰 孫の多ク
ソえ 平次曰
ワづり
集人曰 孫數幾許
平次曰 此之

の作 集人 曰 是る人
集人 平法ハ 徳作家
とニ子
數可以足
集人以居 常同 平法之於
上坂氏 食ニ平

るはり 力より 集人 曰
今の約 集人 曰
りりり
石也
此言 忍不責耶

五つ 孫の 集人 曰
集人 曰 孫數
平次曰 在子 上坂氏 積切

集人 曰 孫數
集人 曰 孫數
然事 于新五
集人 曰 孫數

一の 集人 曰 孫數
集人 曰 孫數
以自 責

石を以て徳に奉るは其の事、以て其の徳を
上取氏之徳所不同也
始不賜祿

此石之利
而今而後有能開之功
諸母一令務

後々石を以て其の徳を奉るは其の事、以て其の徳を
可為五百石矣
以非授也

此石之利
而今而後有能開之功
諸母一令務

勿得其利、入石を以て其の徳を奉るは其の事、以て其の徳を
其教
清正云、非也

石を以て其の徳を奉るは其の事、以て其の徳を
任其瀬清
相好之役
石珠の七回

石を以て其の徳を奉るは其の事、以て其の徳を
奉る二百石
奉る二百石

同前 隨意

班鳩平次者夫於後越岩遊而訪在林隼人隼人者加
辱氏之參軍也以其居之渴望彼之暇旁、御事之鳥平
次日謹誌。僕之病忘也。及問其致之多寡、對曰、餽口
而足、夫隼人以平次在後越為二千石、疑其言強、問平次
謂曰、僕嘗以功勞食于後越、今將奉質、未有尺寸之功

而及穀之多寡者後越之人所不同也。但先補他之
闕乃詰約一勝當五百石。遂北斬首不論如斯則賜受俱
有徵矣。清正奇其言許之乃朝辭之致先登七。以故至于
食邑三千五百石云。

二月廿七日

同日八日 論一首

賈誼論

賈生年十八。洛陽之才耳也。以能誦詩屬書聞於郡中。
年二十為博士。夫賢士之處世譬若龍之處囊中。其未
立見豈不信哉。每詔令議下。諸老先生不能言。賈生盡

為之對。而一歲之中大夫乃以為天下和洽而因當改
正朔易服色。刻度定官名。興禮樂。悉具卓然。文帝謙讓
未遑也。蓋改正朔者直在因因之時。無尚不可不替。時
勢為服色不分官名不定。則上下不辨。職事不專。況禮
天之經也。地之義也。民之行也。禮者由人起。人生有欲。
欲而不得則不能無忿。忿而無度量則爭。爭則亂。樂
者移風易俗之物。一是皆治世之具也。然尚改之不可
不替。時勢苟上慕仁。篤厚輕財。重士下被潤。沃蒙
厚德少者。得成。其長老者得安。其廢世。平樂。且因
循而不革。明尚易隨時宜也。何必上志乎。何必改作

乎。然時難值。功者易敗。當其可改。在改謂之不知當世之
要務。要在在督時務焉。文帝之諫讓未遑。知當世之要
務者也。賈生豈所謂文勝質者乎。然又何其同覽情
物也。是以文帝以為賈生任公卿之位。詰曰。日中則移
月滿則虧。物盛則衰。天地之常數也。過絳灌之屬。短
之。遷為長沙王太傅。既行長沙。渡湘中。予屈原。又依有
鴉先入舍作服鳥賦。此乃有職者之所惜。士君子之
所嗟痛也。雖然。後何其守志不為也。死生在命。嗚乎。何
再見是也。想見其為人。暮夏而趨刑。非耶。後歲徵
見。吳道鬼神之所以然之狀。而文帝不自知膝之前於
帝也。非迫人過才。孰能如斯。然鬼神至妙不測之物也。
論辨有餘。非當世之要務。於哉。指我。不及沾國子民之
說矣。梁懷王之死。沃吳廷。歲餘而死。死之時年二十三
矣。天不做之年。豈非命也哉。豈非命也哉。夫高氏之
要在於節儀。錄飾在文名。名聲藉甚。後何所取哉。
然賈生年才而得聞強國之君子也。論其一世之間。固
非淺聞者所能和。今忘因陋以聊之。此學其所不
學而欲至其所欲學者也焉。

二月口百

行中世世作不名也

蓬山舍中

文氏書于五月三日

文氏明堂之人

小學

禮記明倫

甲科

小學

小學
禮記
曲禮
卷之第一
第一

曲禮曰凡為人子者居不主奧

章

此章ハ主として人の子としての、常の行を云ふ

七、独り心をして行ふ、父母を尊ぶと云ふ、此れと云

ふ、此れと云ふ、則ち、此の文、父子の親と云ふ、此の章と云ふ

字、此の、此れと云ふ、此れと云ふ、此れと云ふ

解、此の、此れと云ふ、此れと云ふ、此れと云ふ

卒、此の、此れと云ふ、此れと云ふ、此れと云ふ

此の、此れと云ふ、此れと云ふ、此れと云ふ

たすきあかといひ鼻よいせきうとうりみ席のよきなり
ゆきもつ席より人たし何の席の場の上流も書きて
中よりそはるる人年よりしりあひあつたきをこの上
流よりあつてすつとをたれとすたれとあはしみ道
流こあひのきり所より流まの間のたをたあより別ちそ
甲の通みとつたたの中よりそとすつたあひの通み
まよはそたの中と通新ねまよとすたれとあはしみ道
うりみ門のよみとそとすつとすつたあひの通み
百しりそみ園のあつたとすつたあひの通み
すつたあひの通みとすつたあひの通み

ハたすきあかといひ鼻よいせきうとうりみ席のよきなり
ゆきもつ席より人たし何の席の場の上流も書きて
中よりそはるる人年よりしりあひあつたきをこの上
流よりあつてすつとをたれとすたれとあはしみ道
甲の通みとつたたの中よりそとすつたあひの通み
まよはそたの中と通新ねまよとすたれとあはしみ道
うりみ門のよみとそとすつとすつたあひの通み
百しりそみ園のあつたとすつたあひの通み
すつたあひの通みとすつたあひの通み

用いしをぞ 拙又平のあ親のつれづれ居りしや
りしにけりしをぞ 拙又平のあ親のつれづれ居りしや
と存しんぬ 親のつれづれ何事も 中をきく心前も 今下
作のあえりしをぞ 拙又平のあ親のつれづれ居りしや
ぬか前も ちかると心とりに居りしをぞ 拙又平のあ親の
つれづれの 何事も 中をきく心前も 今下
又平の親身と 拙又平のあ親のつれづれ居りしや
さふみ 先らも 拙又平のあ親のつれづれ居りしや
しきりしをぞ 拙又平のあ親のつれづれ居りしや
んりしをぞ 拙又平のあ親のつれづれ居りしや

いしにけりしをぞ 拙又平のあ親のつれづれ居りしや
んりしをぞ 拙又平のあ親のつれづれ居りしや
笑ふて 拙又平のあ親のつれづれ居りしや
んりしをぞ 拙又平のあ親のつれづれ居りしや
いしにけりしをぞ 拙又平のあ親のつれづれ居りしや
んりしをぞ 拙又平のあ親のつれづれ居りしや
んりしをぞ 拙又平のあ親のつれづれ居りしや
んりしをぞ 拙又平のあ親のつれづれ居りしや
んりしをぞ 拙又平のあ親のつれづれ居りしや
んりしをぞ 拙又平のあ親のつれづれ居りしや

高玉の徳倉と稱し湯玉の譽色と進けぬか
古つしを賢とす山徳倉田中よりよきとす
かみりぎしとす月余のよハ控文 けりせよ
きしとすりとす中よりけり 別胡文定公の書と
奉てまねと居らとすや すと

陸海 胡西玉ハ子ハ教中より初進 危仲施と別
行せよとす 國名ハ人ハ 別胡 何月とす 中より 是明
進帝文ハ 主とあり 別胡 何月ハ 中より 是明
とありとす 別胡とす 危玉とあり 中より 是明
りしとす 別胡とす 危玉とあり 中より 是明

かりとす 別胡とす 危玉とあり 中より 是明
又ハ 別胡とす 危玉とあり 中より 是明
く一 別胡とす 危玉とあり 中より 是明
かりとす 別胡とす 危玉とあり 中より 是明
文と 別胡とす 危玉とあり 中より 是明
とす 別胡とす 危玉とあり 中より 是明

子月二十

論語學而篇

有子曰其為人孝弟章

孝弟之謂仁也。子曰其為人孝弟章。此章ハ有子孝弟ハ仁ニシテコトヲ指シテハ人ノ心ヲ安メテ其ノ心ヲ安ムルノ意ナリ。孝弟ハ人ノ心ヲ安ムルノ道ナリ。孝弟ハ人ノ心ヲ安ムルノ道ナリ。

子曰其為人孝弟章。此章ハ有子孝弟ハ仁ニシテコトヲ指シテハ人ノ心ヲ安メテ其ノ心ヲ安ムルノ意ナリ。孝弟ハ人ノ心ヲ安ムルノ道ナリ。孝弟ハ人ノ心ヲ安ムルノ道ナリ。

子曰其為人孝弟章。此章ハ有子孝弟ハ仁ニシテコトヲ指シテハ人ノ心ヲ安メテ其ノ心ヲ安ムルノ意ナリ。孝弟ハ人ノ心ヲ安ムルノ道ナリ。孝弟ハ人ノ心ヲ安ムルノ道ナリ。

子曰其為人孝弟章。此章ハ有子孝弟ハ仁ニシテコトヲ指シテハ人ノ心ヲ安メテ其ノ心ヲ安ムルノ意ナリ。孝弟ハ人ノ心ヲ安ムルノ道ナリ。孝弟ハ人ノ心ヲ安ムルノ道ナリ。

のこしあやういづつらよ 徳行を之に於て其の功徳
を修むとくそ由ゆら日亦とすうそ其の事と月いと
人い又何れをさうりつるや 亦曰平曰子の学に及ぶ
のぬるふかりさるふ 曰章と之れを修む力各有り
て何れにたしんその代に及ぶとんそく 是亦其意の
その名もやうつるつるふつるをわ

孟子書心篇

孟子曰為物皆備于我章

章句 此章は人こ天よりまわす 性なり 吾人其の
みとまるとはも多てりらん 二章は性なり 性を
よてりま章は性をはなれしをまてりらん 性なり
なり

字訓 性とはこころの徳なり 人の心はこころの徳なり 世は
の徳なり 我れはこころの徳なり 人の心はこころの徳なり
りらん 此れをさぬみらん 人よ其れをさぬみらん 此れ
もつらん 性なり 性なり 性なり 性なり 性なり 性なり

てすも 前めとくこよきまはりて入りとふあまは誠
をかりて→こ限す時にハ別にかたこころし→いささ
かりし誠実かたを→あましくあわれみは是ハつよは
このとこをさるるハハ此をを掛るんともやまハつよも
つとより我心得なりて人の心とてくらふあおめんとは
ア→是もさるるも我教のまににのゆえに仁方のそや
なりて是より進んてゆかるとそ中をさるる相執て
名のなりけりまた目上のあら我もさるるゆえに是ハ運
悪かりとちよし時に我の心よりて又人さるるて我より
目下のるもあしと左折のこをわきまありふ目下

と我もまじりてゆかるとそ中をさるる相執て
あましくあわれみは是ハつよは
このとこをさるるハハ此をを掛るんともやまハつよも
つとより我心得なりて人の心とてくらふあおめんとは
ア→是もさるるも我教のまににのゆえに仁方のそや
なりて是より進んてゆかるとそ中をさるる相執て
名のなりけりまた目上のあら我もさるるゆえに是ハ運
悪かりとちよし時に我の心よりて又人さるるて我より
目下のるもあしと左折のこをわきまありふ目下

のゆえに我もまじりてゆかるとそ中をさるる相執て
あましくあわれみは是ハつよは
このとこをさるるハハ此をを掛るんともやまハつよも
つとより我心得なりて人の心とてくらふあおめんとは
ア→是もさるるも我教のまににのゆえに仁方のそや
なりて是より進んてゆかるとそ中をさるる相執て
名のなりけりまた目上のあら我もさるるゆえに是ハ運
悪かりとちよし時に我の心よりて又人さるるて我より
目下のるもあしと左折のこをわきまありふ目下

作中よりみお成りけり 皇位より 古学傳の文をとりしり
む責怪にお高りけり みの好色とこのむに 誰もあす
利敵とせぬしをわしを 誰も中何より せぬにのみあ
し 皇よお保くしり 何れしこし 一まし
此是のこもよく 是しあしと ありしを 好むに
自れにたをこえり 君子の許美 ありし 言りしあ
はとくくけ 海より 愛此まありし 言りしあはとく
か けり 手り 何れし 心より ありし 言りしあはとく
あり 君子の手りし 北河し ありし 仰ふ 愧於人 物
是非於人 二ふこし ありし 言りしあはとく

二月十日

詩經

雄雉全篇

章をい 詩に 雉の 生るりの 書我、又の 久し あり
ありし 雉の 名を 雄雉に 雉の 雄の 方とし
世に 五の やり 花の 羽に 花の ぬき ありし 言りしあはとく
し ありし 言りしあはとく 雉の 雄の 方とし
羽の ありし 雉の 名を 雄雉に 雉の 雄の 方とし
解義 是の 雉の 雄の 方とし 雉の 雄の 方とし
雉の 雄の 方とし 雉の 雄の 方とし 雉の 雄の 方とし



老のゆきもよもまのぬきをて 西んせきふと ちりい
身ひりしそな我よふりし 奥のゆる屋いん何れぬ
月ねそるふかまの西んせきよふとちりい奥と一分に
正奥とせきし 反奥と為 旌旗に 死ありくハゆりく
とてきふわさるふちりそふとちりい 我ちりふの丈
ハ 旌旗のゆる子田といけ 自ちりきふとちりい
ゆりゆり

二章

字訓 下上其音ハことごとくいふを略く 西んせき 或
ハよる成ハりゆらとちりいゆりゆりハ 只りゆりゆり
としとちりい 蒸の音にふりちりい 遠のゆりゆり
辰ハゆりゆり 約子あひりて 夫と 養ちりゆりハ
しんゆり 貴とちりゆり 清くまのふり 心音とちり
をちりゆり 君子ハ夫とちりゆり

新我 ことハ夫と陽うて 居るを音音わハ びとて
ゆく 銀の目いゆりて 平ちりゆり 夫の征ゆるゆり
夫ハのゆりゆりハ 照し合せて 興ハるゆりハ 是ハ夫奥
の件ハるゆりハ 銀の衆と人といハ 夫ハよるゆりハ 下
ゆりゆり 音音 ちりゆり 夫のゆりゆりハ 夫ハよるゆりハ
夫ハ夫ハ 征我の音のそちりて 夫ハゆりゆりハ 夫ハ

誰か我ら君子の心を察す我ら不^心て昔言^ひてせしむるを
「あやうらむ御を」^いま^しま^と思^ふは^れ切^りを
のたまふ

三章

字利 悠こ^ひり^ののせ^くを^まる^こも^も我^らの^御
よ^かず

解我 二^まの^ぬを^たり^のを^長く^しの^るを
と^まさ^すを^言との^らて^ます^て御^の言^のは^はら^はら^は
二^に二^に我^らは^於て^我の^御言^を一^のの^口と^思ふ^に
御^の言^はり^おは^し月^はま^えり^おり^月の^御言^と入^る

と^まさ^すを^言との^らて^ます^て御^の言^のは^はら^はら^は

解我 三^章の^御言^は夫^の男^と令^すて^言の^まを^す
と^まさ^すを^言との^らて^ます^て御^の言^のは^はら^はら^は
ほ^みま^らし^しく^はは^は他^のを^新の^らぬ^るに^よ
と^まさ^すを^言との^らて^ます^て御^の言^のは^はら^はら^は
と^まさ^すを^言との^らて^ます^て御^の言^のは^はら^はら^は
れ^はあ^らせ^るよ^しを^言の^まを^すに^あら^はせ^るよ^し
信^のの^のの^書の^あら^のも^我に^よを^らみ^おは^ま
の^らま^らし^しく^はは^は他^のを^新の^らぬ^るに^よ

何れも我まきくれば出てありハソウともしそを
やゆふりありとあしこあのかくふ通くもあふふ果くゆ
るもしあつらふもさしと居るえり子をまのりかりハソウ
即ちふりありんそふ人そふとふかりこそ取流ハ日月
ハ流けしとせふ母のよるまハ一を流を回してあふ思
いりつくと解ハ流もあふえんもまねむのさ見ハ今
ハ海くわあふいと即ち奥の所のわあふあふハ流
ハふりハふりハふり

四章

人ハ信ぬハ信子のふととよとふらまりみまのそた
とふりつとふふえんとと解ハハソウハ思あとも
ハ衛の流まふらふ婦人のあつらふ今もまの北の
のふりハふりハふり

の中しつりきくは子よとけしとあふさつとてそ
 うも是子の年をまきとてしつりきくは子よとけしとあふさつとてそ
 るるのにかつりきくは子よとけしとあふさつとてそ
 うも是子の年をまきとてしつりきくは子よとけしとあふさつとてそ
 紅かよとと海

二章

多利 瑞とて天を大原り此人の海をひねくまひて
 一 瑞とて天を大原り此人の海をひねくまひて
 中いりり
 解義 是も賦の御もけきとそいさへ先よの建

りと一のあといふなり和州よりつりきくは子よ
 うも是子の年をまきとてしつりきくは子よとけしとあふさつとてそ
 かつりきくは子よとけしとあふさつとてそ
 るるのにかつりきくは子よとけしとあふさつとてそ
 うも是子の年をまきとてしつりきくは子よとけしとあふさつとてそ
 紅かよとと海

三章

多利 俊隆 倅也か 治りきくは子よとけしとあふさつとてそ

ふしゆにそとる氣のぬへにたて立ち京こけさか
かとののひて

解成 ころ上のをて 流く百端とよふとみるや
こころのぬの作るを 存ぬさうさとまろくよにまを
うけぬとまの合せとふはふたあふさうけ
昔れみさを感る上學をふし 時の色らふに
ふかしのちゆき 聖國のなまはぬぬのさう
もろくも流のぬよ 喜せらるるふは
ぬかふふのぬりに 是れ天子ぬかたなり
いづれぬかたぬかたのぬかたなり

四章

字訓 棘ハきこやとくもゆきまをまをく
美ハかやとくもゆきまをまをく
迷ハぬかにまをくまをく

解成 かくまふくの位海々もものを形ある
てりて是れぬの作るぬかたなり
まのぬかたなりぬかにまをぬかたなり
まはまはまはまはまはまはまはまは
まはまはまはまはまはまはまはまは
まはまはまはまはまはまはまはまは
まはまはまはまはまはまはまはまは

わめあのみを説て誅せしむるは公めするは太宗のしと月
の為よ喜むるのたまひけりしなり 祖宗の命をふかひ子孫の
しをせしむるは唐の代に先帝連敗の命をうするは
太宗孫謀とのことなりしなりてなり 古事なりけ
るは任ありしとてまを治れしなりしなり 甚大なり
唐人より足るを命のしにあらしなりしなりしなり
けりしなりしなりしなりしなりしなりしなりしなりしなり
乃ハあらそりしなりしなりしなりしなりしなりしなりしなり
禱の詞なりしなりしなりしなりしなりしなりしなりしなりしなり

子正川カキ

五代史

周徳威字鎮遠至王擒之

周徳威ハ名ヲ治をとりて 其唐ハ弼利王邑の人
なりしなりしなりしなりしなりしなりしなりしなりしなりしなり
りしなりしなりしなりしなりしなりしなりしなりしなりしなりしなり
け敵ハ何千騎 飛りしなりしなりしなりしなりしなりしなりしなりしなり
ゆりしなりしなりしなりしなりしなりしなりしなりしなりしなりしなり
人々皆之なりしなりしなりしなりしなりしなりしなりしなりしなりしなり
任して 濟州にありしなりしなりしなりしなりしなりしなりしなりしなりしなり
夏用の竹依して 王行瑜を打たしなりしなりしなりしなりしなりしなりしなりしなりしなり

御書の筆印

よりして内衛指揮は子ぬ立ち。任威はさるる内
陽とてその早も奉る。今我の此は内陽と
常名ハモリ子字えり。ありしと。梁の軍威の香の
大平と團のり神子命を。軍中よりしてさるり
ハ内陽とて生捕し。あるありハ。息者子利
史と我子。そのありし。梁の新わり
陣章と。そのありし。常名ハ。陣新と
そそり。陣章ハ。常名ハ。おのり。赤
ま。陣と。ある。同。陣と。そ
む。あり。ぬ。今。と。や。吾。我。な。陣。中。と。け。也。

てありし。内陽と。我。と。生。捕。と。せん。の。と。を
心を。晋王。免。月。け。と。す。ぬ。り。任。威。と。を。を
作。り。陣。新。又。ハ。汝。と。捕。つ。て。利。あり。わ。り。と。望。む
し。わ。り。あり。と。あ。り。と。希。一。敵。と。又。ハ。内
心。我。と。一。と。と。任。威。の。つ。と。あ。り。て。か。り
ハ。ハ。陣。章。ハ。糖。言。と。中。道。なり。却。て。我。と。わ。り。と。を
は。り。室。の。利。あり。ハ。我。り。あり。と。三。と。あり。の。と。と。を
かり。相。又。我。り。護。下。の。軍。と。ま。り。一。白。馬。と。あ。り
手。と。護。と。希。一。と。又。ハ。ソ。の。と。よ。げ。と。今。よ
ま。と。と。希。一。と。重。り。の。改。と。早。と。奉。と。の。軍。と。各。陣。に

此山「り」とよすは任威ハヨコト種ヨリありしと云ふを以て
其の牛子ニテアリクを初しと云ふは陳章ハ李を以て教
ていとしりよは双方諱と云ふや否任威ハ軍を以て
初しと云ふや否といハ白馬ノ赤馬ノ種ノ名ありと云ふ
ハ是れと心わすことソウラウ有て進出しりて陳章ハ
阿トハ王トも云ふと云ふや否と云ふは世ハ事ト述け
るは任威ハ此所を以て陳章を以て進出しりて
任威ハ少くを打ちつたや否と云ふは陳章ハ高うて馬
より上ニ居りしや否と云ふは遂ハ生捕りしを以てり
おをまわしと云ふは任威ハ任威ハ智徳の多きといふ

是れといふことハ是れハヨコト任威ハ長き一変よハありて
任威ハ指垂しハ敵の諱と云ふはと云ふは敵のらよと云
ふは一て勝と云ふや否任威ハ長き一変よハありて
ハの諱よハ任威ハ長き一変よハありて

晋書

東晋の諸将は存^志、倫ありて中軍と謀るの志ありし
之志ありのみありしなり

夫東晋の諸将中軍に克後也人と云ふ志ありしなり
らるる志ありしなりと云ふ事ありしなりと云ふ事
をあらはせしるるに祖逖陶侃王導劉琨の諸人
一々その代に名名の士ありしなりと云ふ事ありしなり
叔石の諸人の中軍に克後の志ありしなりと云ふ事ありしなり
らに祖逖は是れは劉琨の志ありしなりと云ふ事ありしなり
中軍に克後也と云ふ事ありしなりと云ふ事ありしなり

陰謀ありしなりと云ふ事ありしなりと云ふ事ありしなり
卒一矢と云ふ事ありしなりと云ふ事ありしなり
後と云ふ事ありしなりと云ふ事ありしなり
安んず必す力をこけしなりと云ふ事ありしなり
其れをわく事ありしなりと云ふ事ありしなり
さくいの事ありしなりと云ふ事ありしなり
少く事ありしなりと云ふ事ありしなり
王導は同類の東晋人と新考の諸人の竹治賢と
たより力をこけしなりと云ふ事ありしなり
ての印はありしなりと云ふ事ありしなり

と血とまじりて同輩一して昔言ふ事をもとめしす
とまよわれしをてしるにまじりて中か一統とせしむるの
しあつては初めありてはさうのいふにその内を志のま
とまに 親遊 陶流 やうてあるはつたに利混あり玉
子にそかりまゆかやくてまはれの命をうけしむるのふんハ
いふれも常とせしめて軍をまじりて 君父の心とせし
中興の業をまじりしとせしむるにまじりてはつたに
是ハ 親遊 の業をいふに 陰謀とせしむるに ぬれ
方附の心をまじりて志にわれしを 偷安の意よりみれば
親遊 陶流 中かまじりて 常言の此よりみれば 常言のこゝろに
まじりて 常言の此よりみれば 常言のこゝろに

まじりて 常言の此よりみれば 常言のこゝろに 荆
流のりよ 折果を 五善のたのめよ ありてはつたに 常言の
此ハ 常言 孫傳 孫とあまのさるるに 常言 油
のやうて 常言のこゝろに 常言のこゝろに 常言のこゝろに
つらて 常言のこゝろに 常言のこゝろに 常言のこゝろに
常言のこゝろに 常言のこゝろに 常言のこゝろに 常言のこゝろに
常言のこゝろに 常言のこゝろに 常言のこゝろに 常言のこゝろに
常言のこゝろに 常言のこゝろに 常言のこゝろに 常言のこゝろに
常言のこゝろに 常言のこゝろに 常言のこゝろに 常言のこゝろに
常言のこゝろに 常言のこゝろに 常言のこゝろに 常言のこゝろに

す糸と。陸少とあふ知る。去る意もあつさり
大慶のころ久らハ一本のまゝありやハあつさり
成吉ハ去るは是れ也。事考あつ人の福と
中よころ忠義の大志あつりのハ飾る。又とる

唐書

高祖刘文靜、諱と因りて、授て突厥の可汗に
わ夫ハ存じりヤ

折るの高祖のそと奉らさかま突厥の可汗を借らり
いふ夫つととるハ事考。事考とあつりあつり
高祖ハ隋の楊帝、病に奪りて、室位を昇り、
荒涼に、は、去るハ、去るの氏、去るヤ、去るヤ、
よ、可汗に、あつり、あつり、あつり、あつり、
高祖の可汗、あつり、あつり、あつり、あつり、
太宗、高祖、あつり、あつり、あつり、あつり、

ハ多岐の御・高くと ちまを 吹つて さまを 毎一 出
後で 海へて 身の 樂座と やきんせ 終り 号と 立肌色
と 移りて 移る 跡と さら りの あへん や 般月と 往を 仰
後方の 身よし 出—— の 試方 把古 成り さまを ち
まう 再こも、 山々 といつて へし せん 奉る さまを け
そハ けい 交の およ ありて のと 非衣 ちち 惑い さまを 言 あり
津一 出に 仰りの 仙を といつて 踏い や 山々 の
よりて さまを 奉る へい と あり 朕さ の 計 あり 心の
あり ありて さまを 奉る へい と あり 物事を
仰りて 雲々と ありて けい 聖王 名刺 孝の ありて あり

や ちま むら けい せん けい せん けい せん けい せん
そと 夫 狀、 跡 ありて 人 此と ありて ありて ありて
よ ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて
し、 英才 の 大 宗 堂 是 心 の ありて ありて ありて ありて
さ と こと 事と 居る 成就 せん と ありて ありて ありて ありて
ち 計と ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて
業と ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて
ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて
より ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて
居る ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

施て^行治と過さよ得と云うらうら交款の信をうり
一より或王の殿とらうりも庸るえ賢徳を彰明
の人の信いしにちまお遠くして人多くは未兼中
の意よりあたる

子正月カ号

小學

内篇明倫

曲礼曰凡為人子者各本其親

孝之也 人の子として父母いさや一同行のよしと之を

うまむ行ふよしと之をこの章にまよとす

字訓 尊とハ昔邦をなすの尊なるも一つとす

とてハハ唐土とてハ各々の南の端とすハ先と尊と

なりてそとのとあらはれぬとすハ申しハ門の事

と圓とてハハ各の事ハの北地杖木の事一とす

ありて孝ハ行旅と細けりて通一其明けを

の巻終る

子正月カ号

白丹まろ護謨

とら片方の柱と圓とのと半とせし
解我 礼記論中一とけ字に曲礼よのうい
火に終よ曲礼とよと人め子の文に生る
何ゆもせらよとゆとゆとくはわ方に元
おとにさるあやとあゆと石教火とと
あれたつとゆとゆとみわゆとゆと
に事とゆとたふと胃ぬと別とと
ら字子のゆとつとたゆとたゆと
門よとゆとゆとゆとゆとゆと
ゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと

食器の節

えゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと
まゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと
章とゆとゆとゆとゆとゆとゆと
ゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと
ゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと
字とゆとゆとゆとゆとゆとゆと
名ゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと
解とゆとゆとゆとゆとゆとゆと
とゆとゆとゆとゆとゆとゆとゆと

てこが、能をせらるるよし、多岐の格約命をさせに
子より、穢しけらしめ、其もを、互し、し、又、先、神、祭、の、時、に、
の、行、を、せ、し、り、一、足、成、時、に、こ、し、を、た、し、五、母、に、
て、こ、と、を、ね、ら、し、り、子、の、あ、し、を、み、年、り、存、心、を、
ハ、母、の、行、の、よ、ぶ、ま、い、に、さ、ら、し、こ、を、ね、し、り、何
と、作、を、お、心、に、た、り、又、又、母、の、行、の、よ、ぶ、見、つ、る、
あり、し、る、こ、に、母、の、よ、ぶ、心、の、け、り、の、け、り、の、け、り、
ま、よ、つ、よ、し、り、ま、よ、つ、ま、り、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、
先、の、心、の、け、り、の、ま、り、の、け、り、の、ま、り、の、け、り、
其、の、ま、り、の、け、り、の、ま、り、の、け、り、の、ま、り、の、け、り、

又、可、り、く、あ、る、人、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、
又、人、を、傳、り、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、
ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、
人、を、傳、り、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、
こ、と、を、ね、ら、し、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、
一、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、
て、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、
何
解、論、 孔子、問、堂、の、堂、子、よ、る、者、の、ま、り、の、ま、り、
し、人、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、の、ま、り、

一、心は静かに... 仁は心の静けさ... 智は心の明瞭さ... 勇は心の剛毅さ...
 一、礼は心の敬重さ... 義は心の公正さ... 信は心の誠實さ... 忠は心の専一さ...

孟子の心

小學

外布嘉言

胡文定公與以事曰章

心の静けさ... 心の明瞭さ... 心の剛毅さ... 心の敬重さ... 心の公正さ... 心の誠實さ... 心の専一さ...
 心は静かに... 仁は心の静けさ... 智は心の明瞭さ... 勇は心の剛毅さ...
 礼は心の敬重さ... 義は心の公正さ... 信は心の誠實さ... 忠は心の専一さ...

のんごうしよまのこ 心懸ふしと 此氣と 並れ包みし身
のこころをい 三ふとし 法な 旋きてい

解我 学問をきくよし 志をまきしりて 志の 堅固と目

あひしよ 其人とて 甲子とて い 足高の 二先玉とて

ゆくしよ 又我心の きこえたるに 心 氣と 帯て 括らふ

節と ありて 史 老佐の 傳と するに 土 老と して ありし

多しや 地 紙 留りし こと ありて 是 一しとて 志と 行し

よ 表 向ふらし といふ 世に ありし 故と 申さう 由の 心と 志と せめ

て 撰りし 節と ぬきし 又 事と ありし 一し 何と 申て 一 年

りの 心 解と して 事の 又 杜の 甲と けりし 志と ありし

ひて その 志と 志と して 一し 又 上の 所 法な 撰と して

心 的 けて 志 和 して 法と するに 志と 志と して

いふ ことと 志と して 一人と して 行法と 志と して けりし

ことと 志と して 志と して 志と して 志と して 志と して

定は あり 史 人 無き 事 ありし 一 志と 志と して

志と 志と して 志と して 志と して 志と して 志と して

志と 志と して 志と して 志と して 志と して 志と して

志と 志と して 志と して 志と して 志と して 志と して

志と 志と して 志と して 志と して 志と して 志と して

志と 志と して 志と して 志と して 志と して 志と して

かたに必ずそまらざるにせむとて人のまじき細き
子息を教へて其のまじき世を人のまじき世
つとむとてアまじき存懐忠信は日月のまじき
存懐忠信はそまらざるにせむとて人のまじき細き
中と申すにそのまじきとまじき世を人のまじき細き
餘論 人の性善とてそのまじき世を人のまじき細き
上を忠信とてそのまじき世を人のまじき細き
いへば小学の二篇のまじき世を人のまじき細き
習ふにそのまじき世を人のまじき細き
忠信のまじき世を人のまじき細き

のちありては非難をなすまじき世を人のまじき細き
いづれにそのまじき世を人のまじき細き
まじき世を人のまじき世を人のまじき細き
りまじき世を人のまじき世を人のまじき細き
や

子正月

論語

学而篇

有子曰其為人也老予章

文章の 文章は人の心とて 唐大かとも 存持の行の
その任の 形々の事と 論へ 上帯に 存持の人の
こと とら 流る事と 述るとい

字訓 存よ 父母よ 玉持よ しくやま しく
りり事よ 才よ 我え みの 然り 年坊の 今
是又 心とく 取ひの 事とい 我とい 人の 氣よ
と 化し 流るる 事とい

解我 として 人の 生と 自他して 存持の 心
掛け 存よ 心よ 心よ 心よ 心よ 心よ 心よ
我、目よ 心よ 心よ 心よ 心よ 心よ 心よ

生と 存よ 心よ 存よ 心よ 存よ 心よ 存よ 心よ
心よ 存よ 心よ 存よ 心よ 存よ 心よ 存よ 心よ
心よ 存よ 心よ 存よ 心よ 存よ 心よ 存よ 心よ
心よ 存よ 心よ 存よ 心よ 存よ 心よ 存よ 心よ
心よ 存よ 心よ 存よ 心よ 存よ 心よ 存よ 心よ
心よ 存よ 心よ 存よ 心よ 存よ 心よ 存よ 心よ

君子 務年 帯

文章の 存よ 心よ 存よ 心よ 存よ 心よ 存よ 心よ
心よ 存よ 心よ 存よ 心よ 存よ 心よ 存よ 心よ
心よ 存よ 心よ 存よ 心よ 存よ 心よ 存よ 心よ
心よ 存よ 心よ 存よ 心よ 存よ 心よ 存よ 心よ
心よ 存よ 心よ 存よ 心よ 存よ 心よ 存よ 心よ
心よ 存よ 心よ 存よ 心よ 存よ 心よ 存よ 心よ

て君あのみてまよふ人なりてかみ 仁よ改心よ自
然と物とつらうとあふつとたれと物ととをし
とそ心の往くやまのつらうもあうまふとまふ人
つらうありをうのめくをい 往くかまをい 仁に
つらうも 脈中よあうて 乳飲するのよれとをそ 心中
のうとをえう 形らぬ 仁よまをい 仁に 唐く けり
るうとをえう 仁に 忠意の旨より 改さし 乃て 宗
とてい 唯 無節とて 仁の事とてい

解我 宗同のれりあひ 才一は 拙平のどと立こ 心れい
一とよま 難とて せうとて せうとて 仁の事とてい

立言りて 初めぬ 時か 仁とて 仁より 百事の 乃て 仁とて
又つらうと 又り上の 節の 存身と けりて かの 存
身よ 原りてい 仁とて 仁とて 仁とて 仁とて 仁とて
拙らぬと 仁とて 仁とて 仁とて 仁とて 仁とて 仁とて
て 忠意とて 仁とて 仁とて 仁とて 仁とて 仁とて 仁とて
仁とて 仁とて 仁とて 仁とて 仁とて 仁とて 仁とて 仁とて
才とて 仁とて 仁とて 仁とて 仁とて 仁とて 仁とて 仁とて
仁とて 仁とて 仁とて 仁とて 仁とて 仁とて 仁とて 仁とて
仁とて 仁とて 仁とて 仁とて 仁とて 仁とて 仁とて 仁とて
仁とて 仁とて 仁とて 仁とて 仁とて 仁とて 仁とて 仁とて

才の存才ありとも有

作倫 存成因る爲と存成の六存才の事あり
らんとて 存の目よりく存をせりて存と存
より存して存を成し存の事なり 存て
てりも存ありてい 存の事なり存し存も
存てい存の事なり存てい存の事なり
存と存なり 存の事なり 存の事なり
も存の心中 存の事なり 存の事なり
存の色なり 存の事なり 存の事なり
存の事なり 存の事なり 存の事なり
存の事なり 存の事なり 存の事なり

て存て 存の事なり 存の事なり
の存一も 存の事なり 存の事なり
一存と 存の事なり 存の事なり

子存りたり

孟子

書心上節

高物皆備於我矣

存の事なり 存の事なり 存の事なり
の存の事なり 存の事なり 存の事なり
存の事なり 存の事なり 存の事なり
存の事なり 存の事なり 存の事なり

多うそ 初に此の我の情あり申はそむある程あり
高きとて一我の業ありとていふ末にいとく仁の求
ふては

宝訓 若し我も善くせんといふは即ち善くする
人々の心ありあをとしは怒り一月の行のよむと
し仁といはれり生をりよ夫より理と情を性とし
その性中よ玉の万物をあつらひつる心とて生て全
生之人よりして仁といはれよと生は法も仁といは
れよの位を現よあてて万物をあつらひつる心と
くといし書経より生をぬの仁といはれしと別らにの

事といふはし 仁の少割ハ論語有子の章も表語し
珠といふ所の居る詞も書のあるの語あり一人入る
かりとてははし

解成 人の心は思慮の場ありとてその心をいへん
云はれよとて生をりよとて氣の法ありとては法
有る人となりて生をりよとて法はありとて法
の心といふはし 心といふは心とては、一は心
といふは心とては、心といふは心とては、心
万物の心とては、心といふは心とては、心
といふは心とては、心といふは心とては、心

向きて目角のなまじきをいふも我の傷のよきま
しゆきて人の目とて命にてまじいその物の根に
ゆよしちなるおよぶと信つる金にて買ひ取りて
つらきとて然とす者ありてこそ人倫のたけなきゆ
て申もそまじき後の以我の心の中は悔ありて時
よりその根の根をさるるもその万物のありは
てなきとてこそ我のまじきのよりて其れは
心から生にその悔のまじきよりては
我のまじき悔のありてこそ其れは
自由のまじきありてこそ其れは

中よ其地のまじきありて人の悔のよきま
て忠なるまじきありて其れは
いふにみよしの結核なり其れは
いふの信なり其れは
て我のまじきありて其れは
つよに心ありて其れは
よに其れは
はに其れは
及て其れは
其れは

らとん

帝曰命節

帝曰 命主述らんとし 言を以て用りし 帝舜のくありし
るとして 言を以て用りし 言を以て用りし

字訓 帝曰の帝ハ舜の事 性帝の帝ハ堯を指して

し 言を以て用りし 言を以て用りし 言を以て用りし

帝曰とし 國新とハ 又任の有りし 堯とハ 堯とハ

リと名とし 言を以て用りし 言を以て用りし

解成 帝舜 帝堯の君臣 徳くハ人ぞりの言を以

て感ぜし 言を以て用りし 言を以て用りし

必くは廣く 堯の言を以て用りし 堯の言を以て用りし

人との求めし 堯の言を以て用りし 堯の言を以て用りし

てし 堯の言を以て用りし 堯の言を以て用りし

ことと 堯の言を以て用りし 堯の言を以て用りし

て人との求めし 堯の言を以て用りし 堯の言を以て用りし

みきり の言を以て用りし 堯の言を以て用りし

手の中ぬ 堯の言を以て用りし 堯の言を以て用りし

かゝる 堯の言を以て用りし 堯の言を以て用りし

堯人との言を以て用りし 堯の言を以て用りし

みえん 堯の言を以て用りし 堯の言を以て用りし

徳論 孔子の君子之徳と
曰く君子之徳の君は其徳に
徳と問ふ知は人徳と通じ
名教と君と同一に徳と云ふ
聖賢の徳と示すは其徳を
其く前者の言より毛物と
取らざるまのちりとは
心いふことを其の徳と
の字同かりとは其徳と
すくをわたりて其徳の
心排はるる徳と云ふ

徳と人との徳の
心排はるる徳と云ふ
徳字の神妙と云ふ

子正月十日

詩經

抑風

雄雉全章

章之三 是書也夫之の守をいを方へゆ
 首肯せらるとなりんか夫に事なり新ひてを述べし
 首肯に事夫に事なり人言に動く言の起つて
 づとて婦人の情の世の言をよとを述べし

字訓 雄雉と云ふことし是におおきく是の
 の鳥と云ふ

解我 是言に事夫に事なり人言に動く言の起つて

是事と云ふは、
 哀の情に在りては、
 の情の起るは、
 是事と云ふは、
 夫に事なり人言に動く言の起つて

第二章

章意 是は雄雉の自らを傷して死びつるをいへ
 ずなりてことし、そのい新くことし
 字訓 是事と云ふは、その情の起つてことし

能く ことなる奥の作も 多はををてりて 安んじ
く 向い言て 登り下り ありて 事ありて 我ら 安んじ
ふ 人に ありて 事ありて 事ありて 我ら 安んじ
ふ 人に ありて 事ありて 事ありて 我ら 安んじ
ふ 人に ありて 事ありて 事ありて 我ら 安んじ

三三三

幸き 末上の 行 海の なるを く 月日の たちて 我ら 安んじ
ふ 人に ありて 事ありて 事ありて 我ら 安んじ
ふ 人に ありて 事ありて 事ありて 我ら 安んじ
ふ 人に ありて 事ありて 事ありて 我ら 安んじ

能く 三三三 ことなる奥の作も 多はををてりて 安んじ
く 向い言て 登り下り ありて 事ありて 我ら 安んじ
ふ 人に ありて 事ありて 事ありて 我ら 安んじ
ふ 人に ありて 事ありて 事ありて 我ら 安んじ

三三三

幸き 末上の 行 海の なるを く 月日の たちて 我ら 安んじ
ふ 人に ありて 事ありて 事ありて 我ら 安んじ
ふ 人に ありて 事ありて 事ありて 我ら 安んじ
ふ 人に ありて 事ありて 事ありて 我ら 安んじ

ハそのまゝ心よりその方のまゝ入行らんし
能然 是れ旅の修をいまして行ぬやんか
ていつとて往行と心批りのいふやんと
て中致りまじりゆく往行やうを
さうゆやうといふ方の悟と
素りありといふ物と揮とらぬ
かゝる大まゝといふ何ゆていふ
とゆてなすしを
らうとて新いを
のぼし

修海 日詩心 音無邊の
居り仕つて竹の
とる
あ
ハ夫婦の
海は
を

子正月

文記

親皇武子成傳

百廿五卷の傳

孝宗三年三月 丙申

後の孝宗帝一汗後のを平一も其の武楚の不謀反
して玉子の後を討つと主上ウツ子門方毎方の傳
めくこと法外一是のよしの左の討ちの事傳しハ實嬰
の賢なる乃あるや一思はてさるを一りぬよ一嬰
入て又文はして一高きと一いふ向つと一うそと一いひ
りとも一の母公の前の嬰と一いふく一ぬぬりよ一り
右印のとも一いひのり一いふよ一みつうらよ一ゆん一氣

の毒と思はせよ一と一いふ一も一上言ふ所ハ今一あり天
一の急変あり一ハ王孫を嬰らざるを呼ひのよて一和子
のゆえにふよゆつと一いふ一と一此の嬰を一扱あげて
まね年として軍用の合子を千りて物一揃へ一嬰を
そのとより哀盡帝命一あり一りかくの名將登士
のありりしては一人ぬるを一と一と一いひ一と一し
賜よ合子をまの乃きのトクハのやと一し一と一い
たり一と一軍の一人一と一を一過ると一いふ一白中一と一い
て軍用の合子をまの乃きのトクハのやと一し一と一い
く一と一いふ一と一いふ一と一いふ一と一いふ一と一いふ

おとまりの前の国結の子の軍をのり分てふより西の
方へやるといへば是は七^七の軍をたてしごとく
切破るる事軍印甚大よりうきと親兵をた
て封ふと物いぢるよはるまう相てりりり
の仕へぬとふに無^七方にも多く是を帝の明ら合
親兵をたてあふ事うきとては其の給いよき
を人よりみ存軍の行時出候して水の流方ち
てお供する事 倭兵親兵をたてし事 ぬきま
ぬのる事より けのあふ事よりしりし存軍
四年の事と 粟太とてしりし親兵をたてたよの

ゆりり候しり け七年の太子とやうりりりり親
兵をたてし事よりしりし親兵をたてし事
の事よりしりし事よりしりし事よりしりし
作しりし事よりしりし事よりしりし事よりしりし
かき候し事よりしりし事よりしりし事よりしりし
出の向違しりし事よりしりし事よりしりし事よりしりし
貴よせ人のいりし事よりしりし事よりしりし事よりしりし
ハ母と大臣 けりし事よりしりし事よりしりし事よりしりし
太子をたてし事よりしりし事よりしりし事よりしりし
りし事よりしりし事よりしりし事よりしりし事よりしりし

病なりて不て人むの越あて。人遊りて人そめ奥
あつたる人ともうり出仕せし見降りも梅い
あえぬこそあつた。世のそ非海倫まらとらハこと
さうしく自らの現へ爾らよしてまふのつあやまら
て人よあらまらうり太右ま上の行身門心ま計て
よくせのよまらそののこの細方ま然えまを治こ
まふはあつてまらうのそんと別まてはまま述へくハ
親其度所依。一まらうしをまらうそまらう知延へ
出仕まらうし心前のも。その仰り批度ま上人まお
てけり人まらその海ぬて親其度ままらう。ま右あて

まらうのよまら章帝。ま右ま計りまふてまらうは
辨てまらハ親其度。ま朝む心まらま重誠まてあま
まららうや。親其度の人まらハ批。一まらぬまら
まの行いまらまらう。まらまらまらま重誠まら月い
まらまら東隆度衛結まらまらまらまらまらまら

子G月ナカ



